



各科と綿密に連携しながら、がんに対する標準的化学療法や開発的化学療法、セカンドオピニオン、緩和ケア、開発的がん免疫療法などに取り組んでいる当科。大学病院のメリットを生かしたチーム医療が強みだ。



現在、全国に11か所設けられている「がんゲノム医療中核拠点病院」。当院はその連携病院に指定されている。患者一人ひとりに応じたゲノム医療への期待は、今後ますます高まっていくものと予想されている。



「免疫チェックポイント阻害剤（ICI）」は点滴注射で、基本的には数週間に1度のペースで投与する。今後、保険適用が拡大する見通しとのこと。

医療最前線

》》vol.57

川崎医科大学附属病院
臨床腫瘍科

Report!

新規治療法の開発から 緩和ケアまで、がん治療をリード

教授(臨床腫瘍科)

五大がん、難治がんなどに、独自の取り組みで幅広く対応。

「現在、がん治療は手術、放射線治療、そして化学療法が三本柱です。以前は外科系医師を中心に臓器別、診療科別に治療方針が決定されていましたが、進行がんの病態は複雑で、既存の診療科の専門性を越えた病気への理解と対処が求められるケースがあります。当科は、ほかの診療科と連携し、その中核となって、がん患者さんの複雑な病態に対応しています」と話すのは山口佳之教授。がん免疫療法、がん化学療法、緩和ケアなどを専門とし、がんチーム医療の中心的存在として当科を率いている。

現在、当科が治療しているおもな病気は、いわゆる五大がん(胃がん、肺がん、大腸がん、肝臓がん、乳がん)、すい臓がん、その他の悪性腫瘍、原発不明がん、難治がんなど。加えて難治がんに対する新規治療開発やセカンドオピニオン、緩和ケア(今年七月二日に緩和ケア病棟オープン)、開発的がん免疫療法などに取り組んでいる。

なかでも近年、手術、放射線、化学療法に続く第四の治療法として注目を集める、「免疫チェックポイント阻害剤(ICI)」の研究的治療も早くから実施している。

「現在、五種類のICIが、肺がんや胃がんなどで保険適用が認められています。ICIは一部で高い治療効果が見られており、当科ではそれに加えて、二〇〇九年から「活性化自己リンパ球移入療法」という免疫療法にも取り組んできました。今ではそうした実績を生かし、ICIにこの療法と放射線治療を組み合わせる複合免疫療法の研究を進めています」。

山口教授が中心となって、さまざまな新規治療開発に取り組む当科。ICIに関しては、全診療科が参加する「チームICI」を立ち上げ、副作用などの情報を共有している。また、院外においても、山口教授が理事長を務める「日本バイオセラピー学会」が各学会と連携し、全国の医師たちに教育・啓発活動を行なっている。

もともと外科医だった山口教授。その長いキャリアのなかでつねに心に留めてきたのは、「いつも患者さんとご家族の気持ちになって考える。そして新薬や治療法など、つねに学び続ける」という医師としての矜持。

「がんの三大症状は狭窄、出血、疼痛です。狭窄とは食べると腹が張る、つかえる、吐くなどの症状。出血はコーヒーのようなものを吐く、便が黒い、便に血が付く。疼痛は食べると胸にしみる、お腹や背中が痛むなど。そのほかにも倦怠感や疲労感、体重減少など、全身消耗症状があれば早めの受診をすすめます」。

世界的規模でがん研究が加速する今、当科の存在価値は今後さらに大きくなっていくと予想されている。

お問合せ

川崎医科大学附属病院
倉敷市松島577
☎086-462-1111
<https://h.kawasaki-m.ac.jp/>

Clinical Oncology



晴れた日にはフィッシング、ほかにもカラオケや妻との食べ歩きなど、オフもアクティブに動きます。ちなみにルービックキューブは1981年・23歳の時に日本記録を樹立(タイム27秒)、今でも平均25秒で揃えられます。

山口佳之 教授
Yoshiyuki Yamaguchi

■専門分野

消化器がん、がん免疫療法、がん化学療法、緩和ケア

■認定医・専門医・指導医

日本がん治療認定医機構暫定教育医、日本臨床腫瘍学会暫定指導医、日本緩和医療学会暫定指導医、日本がん治療学会臨床試験登録医、日本外科学会指導医・専門医(認定登録医)、認定医、日本消化器外科学会指導医・専門医(認定登録医)、日本大腸肛門病学会指導医・専門医、日本乳がん学会認定医、日本消化器外科学会消化器がん外科治療認定医